

「教育臨床総合研究13 2014研究」

宿泊合宿による「1000時間体験学修」についての新入生セミナーの実際とその成果

— ピア・サポート制度の活用 —

States and Effects of a Training Camp Seminar about “Activities for Education Experience”
for the New Students – The Utilization of Peer-Support Activities –

村上幸人*	藤田耕一**
Yukito MURAKAMI	Koichi FUJITA
寺井由美*	光森智哉*
Yumi TERAJ	Tomoya MITSUMORI
大谷修司***	
Shuji OHTANI	

要 旨

高等学校までの学級を単位とした学校生活を送ってきた新入生にとって、大学生活開始直後は、これまでの学校生活との様式の違い、いわゆる「大学1年ギャップ」による不安感や困り感の大きいことが調査により改めて明確になった。そして、島根大学教育学部で平成17年度から初年次教育の一環として行っている「入門期セミナーI」では、ピア・サポート制度を活用した取り組みにより、入学当初の不安感や困り感を解消する上で、大きな成果を挙げていることが示された。

〔キーワード〕 大学1年ギャップ，ランチメイト症候群，初年次教育，ピア・サポート

I はじめに

学習者である児童・生徒たちが異校種への進学によって、学校生活の違いや学習集団の違いに直面し、戸惑いや困り感を自分の力で克服することが困難なまま自己実現が図れないという、いわゆる「小1プロブレム」「中1ギャップ」などの接続期における諸問題が叫ばれて久しい。一方で、高等学校と大学の接続間については、受験による全国規模の各個人による進学であることや大学生はすでに大人であるという認識から、校種間の違い（「大学1年ギャップ」と称する）があるのは当たり前であり、発達段階上において各自で解決すべき問題として捉えられやすく、大学生活上の諸問題への応対は学生個人の責任に帰せられやすいため、他校種間に比べて表面化しにくいと思われる。

*島根大学教育学部附属教育支援センター

**米子市立福生東小学校（前島根大学教育学部附属教育支援センター）

***島根大学教育学部自然環境教育講座（前島根大学教育学部附属教育支援センター長）

しかし、ギャップに対応できない学生への積極的な支援としての初年次教育の必要性が次第に認識され、現在では多くの大学で入学生に対する初年次教育が実施されている。その内容は大学生活への適応や学習スキルの会得、コミュニケーション能力の向上など様々である。

教育学部では、初年次教育プログラムとして、3つの授業を用意している。そのうちの最初に行われる「入門期セミナーⅠ」は、独自の教員養成プログラムである1000時間体験学修を導入する上で、その内容を理解して必要となる手続きやマナー等を学ぶためのものであり、入学後第2週目の土曜日・日曜日に宿泊を伴う合宿で行っている。本セミナーについて、以前の調査では、新入生による自己評価により「1000時間体験学修の理解」「仲間づくり」「教育学部生としての意欲や自覚の育成」のいずれの項目においても高い数値を得ていたことが報告されている¹⁾。そこで今回、大学入学当初の学校生活の違いから来るギャップとそこから生じる不安感・困り感の現状を調査した上で、入学当初の諸問題を解消する上で「入門期セミナーⅠ」の有効性を改めて検証する。

Ⅱ 調査対象とその特徴

調査対象は2013年度島根大学教育学部入学生179人であり、2013年9月25日に質問紙法によるアンケート調査を実施した。そのうちアンケート調査を回収できたのは173人、回収率は96.6%である。なお、本文での数値表示は小数第2位以下を四捨五入したものである。

本学部入学生全体では、希望して入学した学生は120人で69.4%、反対に不本意に入学した学生は24人で13.9%である。全体的に希望して入学してきた学生が多いと言える。図1で入試形態別に見ると、推薦入試ならびにAO入試によって入学した学生のうち、本学部を希望して入学した学生はそれぞれ92.7%、86.2%といずれも高い。また、一般入試では、前期実施で63.6%、後期実施で42.1%が本学部を希望して入学した学生である。推薦入試ならびにAO入試の希望者の数値が高いのは当然ではあるが、全体の55.3%を占める前期入試の合格者でも過半数が希望によるものであることがはっきりしている。後期入試では「とても希望」していた学生は皆無であり、いわゆる第2希望以下として受験している傾向がある。

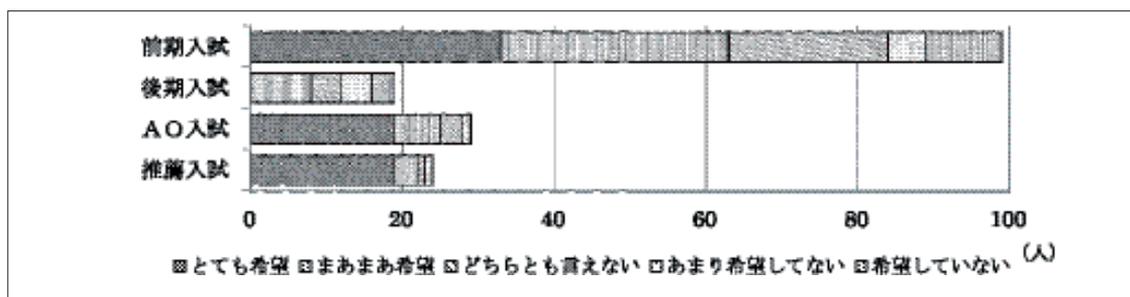


図1 2013年度入学生の入試形態と入学志向度合い

Ⅲ 「大学1年ギャップ」における不安感・困り感の実態

1 入学前の不安感

入学直前の3月において、本学部への入学に対する不安感がどれほどのものであったのか、その調査結果を図2に示す。

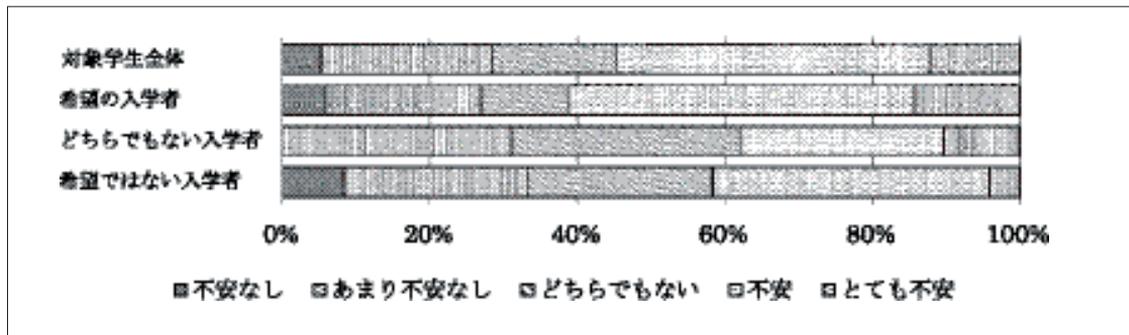


図2 2013年度入学生における入学前の不安感の度合い

不安感をもって入学した学生は94人、54.3%であり過半数を占めている。進学希望別に見ると希望して入学した学生が60.8%も不安感をもっており、入学希望についてどちらでもない学生の同数値37.9%、希望せずに入学してきた学生の同数値41.6%と比較して非常に高いことが分かる。

さらに、不安感をもっている94人の、その理由を図3に示す。筆頭に挙げられたのは「大学での勉強」である。高等学校までと大学での授業の質・量の違いはどの程度か、学習内容を理解することができるのか、また、自分自身の実技等の技能の実力が通用するのかといった不安が挙げられている。特に教育学部については、教育学というものがこれまでの教科・領域に直接的に無いため内容のイメージがしにくいことも原因の一つになると思われる。次点以下は「知らない場所での生活」「友人や先輩がいない」「一人での自炊等の生活」「家族から離れること」などである。「家族から離れる」と回答した学生は不安感が強い学生の割合が高い。いずれも、ある程度予想できる回答であり、学生本人も進学についてのこのような発達課題的な困難さを覚悟をして入学していることであろう。しかし、人生上、初めての経験であろうことには変わりなく、課題を克服するための能力を本人が発揮できるよう、受け入れる大学側において支援体制を整えておく必要があると考える。

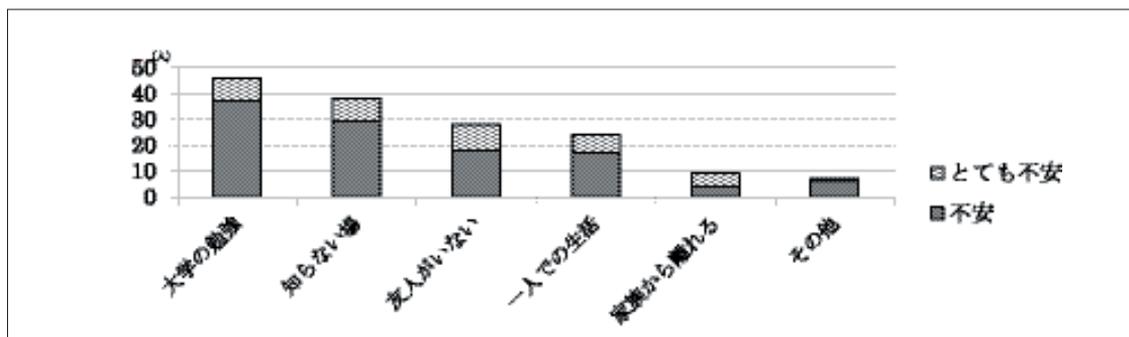


図3 2013年度入学生における入学前の不安の理由（複数回答あり）

2 入学直後の困り感

では、本学部実際に入学した4月当初の困り感がどれほどのものであったのか調査結果を図4に示す。

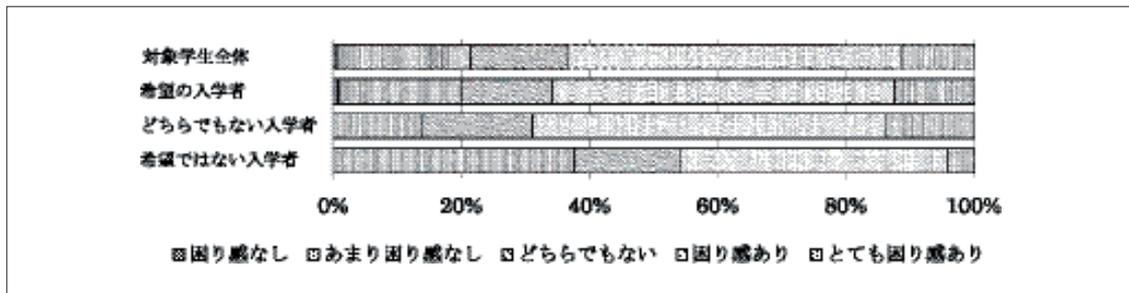


図4 2013年度入学生における入学直後の困り感の割合

入学直後に困り感をもった入学生は110人、63.6%であり過半数を占めている。進学希望別に見ると、希望して入学してきた学生で困り感をもっているのは65.9%、希望についてはどちらでもない学生の同数値は69.0%であり、希望せずに入学してきた学生の同数値45.9%のみが比較して低いことが分かる。希望でない入学生の不安感や困り感が少ない背景として、自分にとって最善の進路ではないゆえに、そこで躓いてはならないという自負心があるのか。

なお、困り感をもっている110人の理由を図5に示す。入学して直後に困るのは、まずは「履修の仕方」である。高等学校までは学ぶ教科等は時間割表として与えられる。しかし、大学からは自ら学びたいものを取捨選択して時間割を作成しなければならない。しかも、卒業するために必修と選択の授業を、見通しをもって適確に組み合わせなくてはならない。高等学校までの学びに対する姿勢の違いが象徴的に表れる場である。学生にとっては予想すらしていない作業が即座に要求される。さらに、これらの説明会である入学ガイダンスの形態が、これまでは学級に所属して決められた座席に着いて担任の先生の指示のもとで行動すれば対応できていたが、大学では学級がなく、担任や友達などの相談相手もすぐに見つからず、連絡もメールや文書、掲示によるものを自分から把握・解釈しなくてはならないのである。「せめて入学直後くらいはもっと丁寧に説明を行ってほしい。大学生なんだから一人でやれということかもしれないが、高校とは全く違うスタンスでやることも多く、何から手をつけていいのかわからなかった。」と記載している学生もいる。入学生のストレスがかなりのものであることは、ガイダンスに立ち会う大学教員には毎年実感できるものであると思われる。

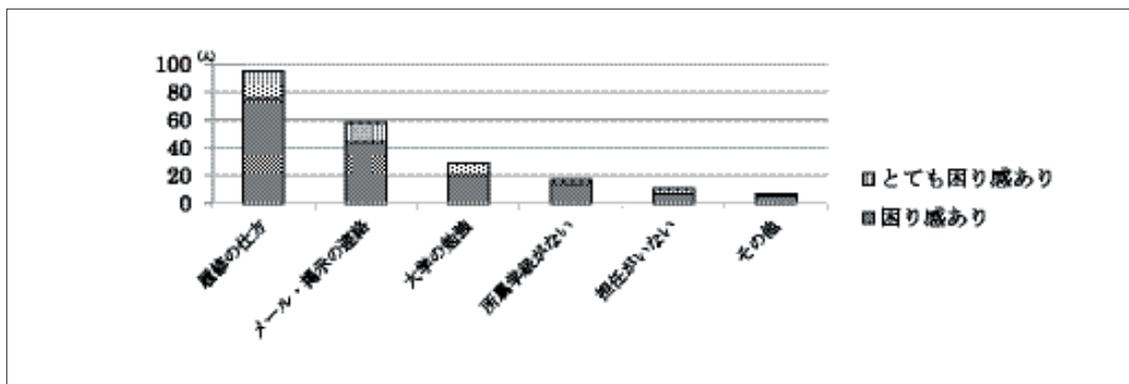


図5 2013年度入学生における入学直後の困り感の理由（複数回答あり）

3 ランチメイト症候群の状況について

「ランチメイト症候群」とは、学校や職場で一緒に食事をする相手がいないことに一種の恐怖を覚えるというもので、2001年の4月頃から報道で取り上げられたことでこの呼び名が広まったものらしい。

この症候群の特徴は、一人で食事するときの孤独感と、その孤独である自分を孤独でなく楽しそうに過ごしている他人（集団）に見られることで「自分自身が無価値である」という自己を否定せざるを得ない状況になることへの不安感が一種の強迫観念となっている。解決策が見出せない場合は、その恐怖や惨めさから逃避するために、一人で食事をする姿を他人に見られないように公共の食事の場所から隠れて食べるという行動を起こす。中には、完全に個人一人になれる学内の場所として行き着くところであるトイレの個室を食事の場所を選ぶ場合もあると言われている。これを俗に「便所飯」と呼ぶ。これについては、存在自体が疑問視されやすいが、2009年に尾木直樹が東京都内の大学生400人を対象に行ったアンケート調査の結果では、「一人で学生食堂に入りにくい」が6割近く、「昼食は友達と一緒にでなければみじめだ」が45.1%、「便所飯の経験がある」が2.3%であることを報告している²⁾。

そこで、本学部入学生の現在におけるランチメイト症候群についての調査結果を図6に示す。

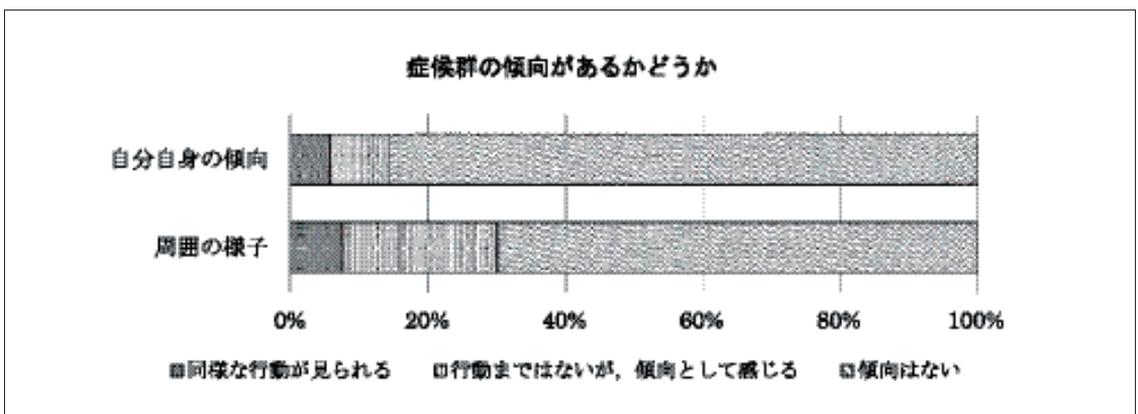
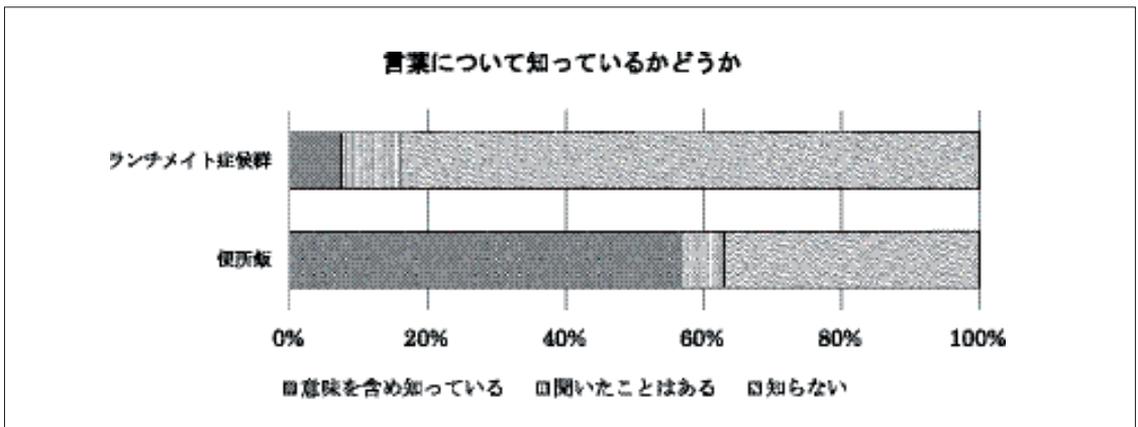


図6 2013年度入学生のランチメイト症候群の実際

本調査では、「ランチメイト症候群」という言葉を意味理解している学生は7.5%に過ぎない。一方で、「便所飯」という言葉は56.6%に上る。これは、言葉の持つインパクトやマスコミ等の報道、インターネット上での話題として知られていると考えられる。そして、「このような症候群と同様な行動を取ったことがある」という学生は6.8%、「行動を取ったことはないが取りたいと思うことがある」と回答した学生は8.6%に上る。また、「周囲にこのような傾向の学生がいる」と回答した学生は7.5%、「周囲にこのような傾向が多少感じられる」と回答した学生が22.5%である。合わせると30.1%の学生が何らかの形で本症候群を身近に感じており、本学部にとって無縁の話ではない。折しも2013年8月9日（土）に本学部で行ったオープンキャンパスの学生フォーラムで、「1000時間体験学修」報告を2013年度入学生の4名が行っているが、その発表スライドの一部（図7）はランチメイト症候群を想起させる内容である³⁾。入学当初の学生にとって、大学生活での希望や願いをもって意欲的に活動するためには、その基盤となる仲間、学内で応援してくれるサポーターを得ることが必要であると痛感する。

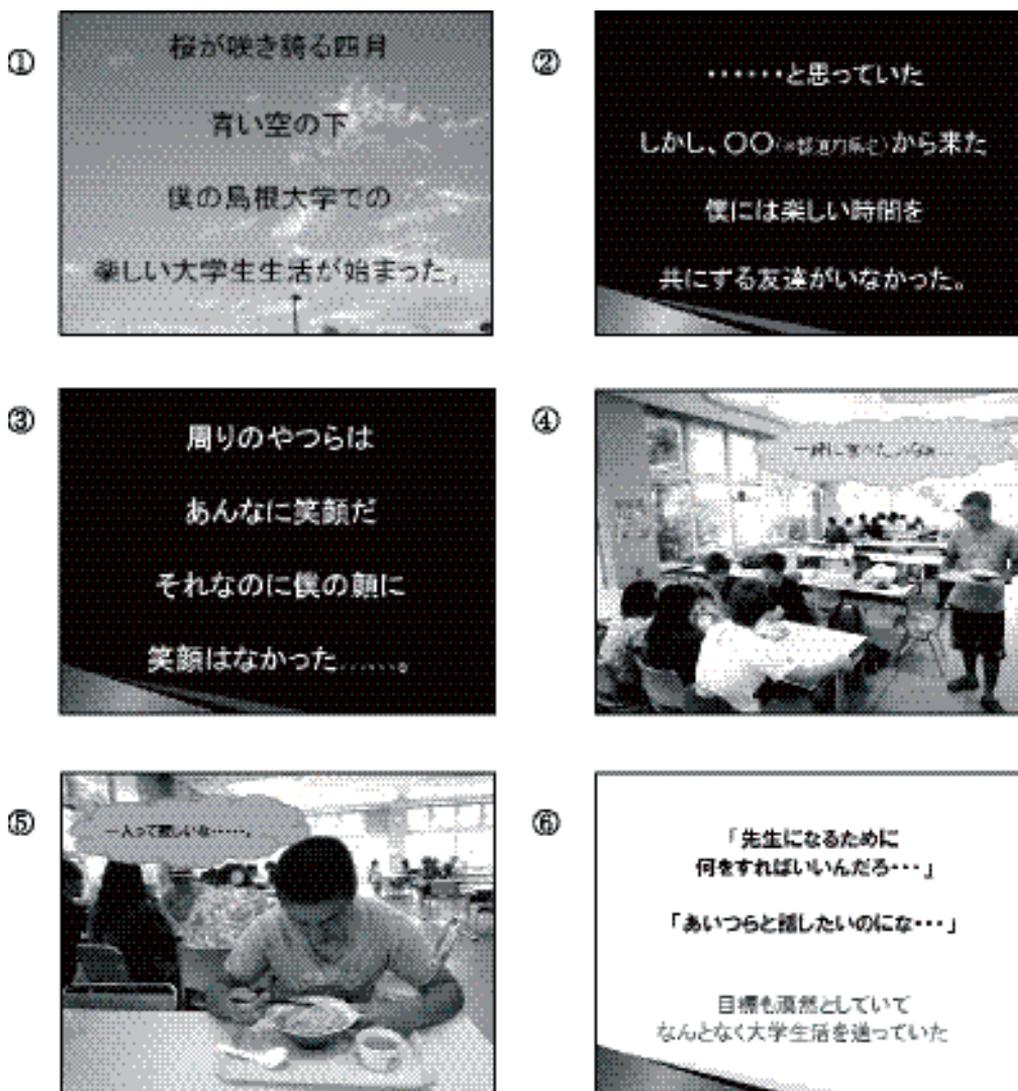


図7 2013年オープンキャンパスでの学生の発表スライド（一部）

IV 「入門期セミナーⅠ」の取組の趣旨と変遷

1 本学部における初年次教育

これまで見てきた新入生の様々な進学に関する不安感や困り感を解消し、入学者の学習意欲を低下させることなく学習面から生活面に至るまでスムーズに適応できるように、島根大学では島根大学教育開発センターを中心に『島根大学初年次教育プログラム・ガイドライン』⁴⁾を策定し、学習面から生活面に至るまでスムーズに対応できるよう、2009年度より全学において初年次教育プログラムが展開されている。

教育学部では、ガイドラインをもとに4年間の学びを方向づける重要な最初の一步として、次の3つの授業群（体験活動と授業）から構成される初年次教育プログラムを用意している⁵⁾。

(1) 入門期セミナーⅠ

島根大学教育学部の独自の教員養成プログラムである「1000時間体験学修」を導入する上で、その意義や内容を理解し、必要となる手続きやマナー等を学ぶセミナーである。

(2) 教職ガイダンス・入門期セミナーⅡ

子どもたちに教える内容についての分野に関する専門性を身に付けるための見通しをもち、様々な分野に触れて学ぶ中から自身の主専攻をしっかりと考えて自分で決めるためのセミナーである。

(3) 学校教育実践研究Ⅰ・学校教育実習Ⅰ

学校教育実践研究Ⅰで、教師に必要なコミュニケーション能力の基礎を養い、授業を教える側への立場への変換をはかる。そして学校教育実習Ⅰで、実際に幼稚園・小学校・中学校での授業観察を通して、教えることについて考える一步とする。

2 「入門期セミナーⅠ」の経緯と特徴

本セミナーは、新入生全員を対象に2005年より開始され、当時から変わることなく入学直後の4月第2週目の土曜日・日曜日に、宿泊を伴う必修の合宿として、青少年教育施設を会場にして行っている。1000時間体験学修の基礎体験領域の必修時間の20時間分として認定される。教育支援センターの専任教員がその運営や学生指導の担当に当たるが、他の教職員の自主的な参加が可能であり、新入生とのコミュニケーションを初期に行える場となっている。

2005年の開始当初は、附属教育支援センター専任教員を中心に教員で1000時間体験学修の導入にあたっての研修として運営していたが、2006年より1000時間体験学修の既習者が育ってきていることからピア・サポート制度を活用し、上回生を運営スタッフとして加えて体験活動の内容紹介ならびにグループ協議、体験活動の手続きやマナーの講習の企画・運営を任せている。ピア・サポートの効果が認められ、2006年に11人であったピア・サポーターが2007年に15人、2008年に27人と、年数を追って増やしている¹⁾。そして、次年度に向けての学生企画会議で「①各グループに1人の学生スタッフを置く。②学生スタッフ一人一人に役割を与え、責任感と達成感をもたせる。③代表スタッフはグループに付かず、全体統括を行う。」という3点が提案されたことを受け、2009年には実行委員にあたる組織を明確に作っている。具体的には、基礎体験活動の実績を考慮して6人の学生を推薦・決定後企画会議を開催し、その後に2・3年次生30人を募集、合計36人のスタッフ団を結成して全日程のほとんどの企画から運営までを行っている。

2010年以降は、セミナー全体の運営を統括する責任者6人を3年次生から一般募集とし、組織を編制している（図8）。

統括では、全体を総括する総括リーダーを2人、各研修を担当するリーダーを各1人ずつ、合計6人で全体の計画、運営を行う（統括メンバー）。

統括会議（写真1）で研修の日程や内容を検討した後、さらに30人のスタッフを2・3年次生から募集してスタッフ会議を行い（写真2）、各研修担当に配置して研修リーダーを中心に各研修の企画、運営を行う。

また、この30人のスタッフはGL（グループライダー）として、新入生の班（各6人30班）に1人ずつ付いて支援を行う役目ももつ。

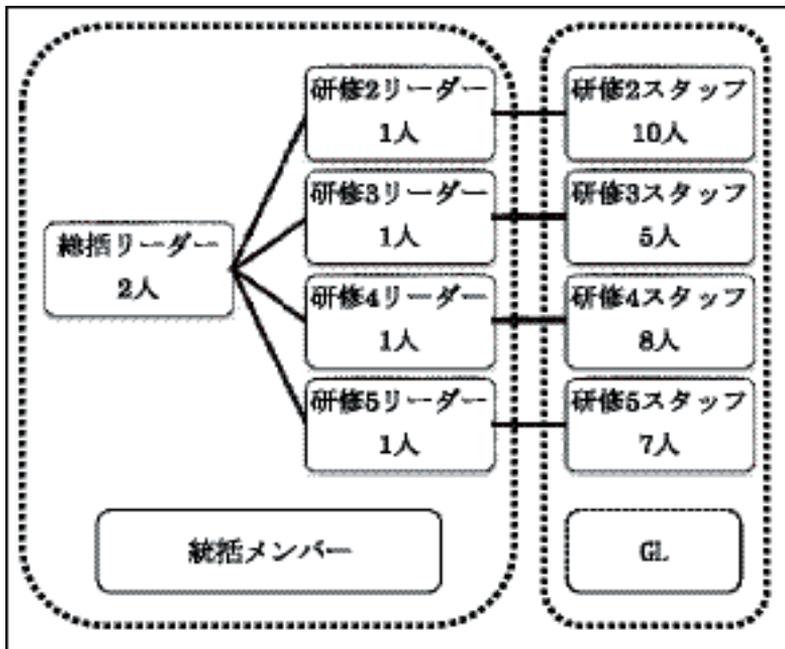


図8 学生スタッフの組織図（2013年）



写真1 統括会議



写真2 スタッフ会

3 「入門期セミナー1」の取組内容

2013年の日程は図9の通りであり、国立三瓶青少年交流の家（島根県大田市）を会場に実施している。

	9:00-9:30	10:00-10:30	11:00-11:30	12:00-12:30	13:00-13:30	14:00-14:30	15:00-15:30	16:00-16:30	17:00-17:30	18:00-18:30	19:00-19:30	20:00-20:30	21:00-21:30	22:00-22:30
4月13日(土)	集合・受付	研修1(入る)	身の整理	開講式	オリエンテーション	昼食・休憩	研修1	研修2	研修3	研修4	研修5	研修6	夕食・休憩	研修7
4月14日(日)	朝食・準備	研修8	身の整理・片付け	朝食・準備	研修9	昼食・休憩	研修10	開講式	研修11	研修12	研修13	研修14	研修15	解散

図9 2013年入門期セミナー1の開催日程

参加新入生にとっての本セミナーのねらいは、次の2点である。

- ① 教育体験活動「1000時間体験学修」の全体像を把握し、4年間の大学生活の見通しを持つ。
- ② これから学生生活を共にする同級生と交流を深め、円滑な人間関係を築く。

これを実現化するために、次の7つの研修を用意している（2013年の場合）。

(1) 研修1「1000時間体験学修の意義」

1000時間体験学修における教育体験の意義と各領域の活動についての説明を、学部教員の講義により行う。

(2) 研修2「基礎体験活動の進め方」

基礎体験領域における基礎体験活動の魅力や活動の流れを、学生スタッフの体験をもとにした劇や解説を通して学ぶ（写真3）。



写真3 研修2の様子

(3) 研修3「基礎体験活動に関する相談会」

5人から6人の少人数グループに分かれて、学生スタッフへの質疑応答を中心に、1000時間体験学修についてもしくは島根大学教育学部の授業や日々の生活等についての懇談を行う（写真4）。



写真4 研修3の様子

(4) 研修4「活動先におけるマナー全般のあり方」

基礎体験活動に臨むにあたって、社会人として必要なマナーのあり方（連絡の取り方や服装など）を、学生スタッフによる演習をもとに実践的に学ぶ。

(5) 研修5「新しい仲間づくり」

アイスブレイクや集団でのレクリエーションを通して、楽しみながら円滑な人間関係を築けるような活動を、学生スタッフを中心に実践する（写真5）。



写真5 研修5の様子

(6) 研修6「青少年教育施設の教育プログラム体験」

青少年教育施設における自然や設備を活かしたプログラムを、グループ単位で選択して実施することで、そのプログラムのよさや運営のあり方、協調性の大切さを実感する。2013年では、オリエンテーリング、スナッグゴルフ、キンボール&ドッジビーの3つのプログラムの中から、グループごとに1つを選択して実施している。

(7) 研修7「この二日間のふりかえり」

二日間の宿泊体験活動をふりかえり、基礎体験活動記録票を使って自己評価を行い、現時点での各自の成果や課題、展望を明らかにする。

宿泊合宿であるので寝食も共にする。食事や入浴、清掃活動、朝のつどいなども施設の決まりに従って行う。移動時のバスの車内でも自己紹介や簡単なレクが学生スタッフにより用意され、円滑な人間関係作りに努めている。学生スタッフ側も、当日を含めて研修を準備する約2

ヶ月間、これまでの各個人の基礎体験活動での学びを最大限に活かして企画・運営を協力して行う。新入生に対する理解やかかわりのあり方もふくめてのセミナーの準備は、議論による衝突や試行錯誤により多くの時間を要するが、誰もがそれを受け止め、熱心に取り組んでいる。

V 「入門期セミナーⅠ」の取組に対する成果

1 入門期セミナーⅠに対する新入生の評価

研修7では、基礎体験活動記録票を使って次の観点で5段階による自己評価を行っている。

- ① 入門期セミナーⅠは有意義な活動となったか。
- ② 同級生との交流を通して新たな人間関係を結ぶことができたか。
- ③ 1000時間体験学修の全体像を理解することができたか。
- ④ 教育学部生としての意欲や自覚をもつことができたか。
- ⑤ 入門期セミナーⅠに向けて立てた目標は達成できたか。

この自己評価の各年の平均値、ならびに5つの観点の数値を総合して平均化した数値の推移を図10に示す。

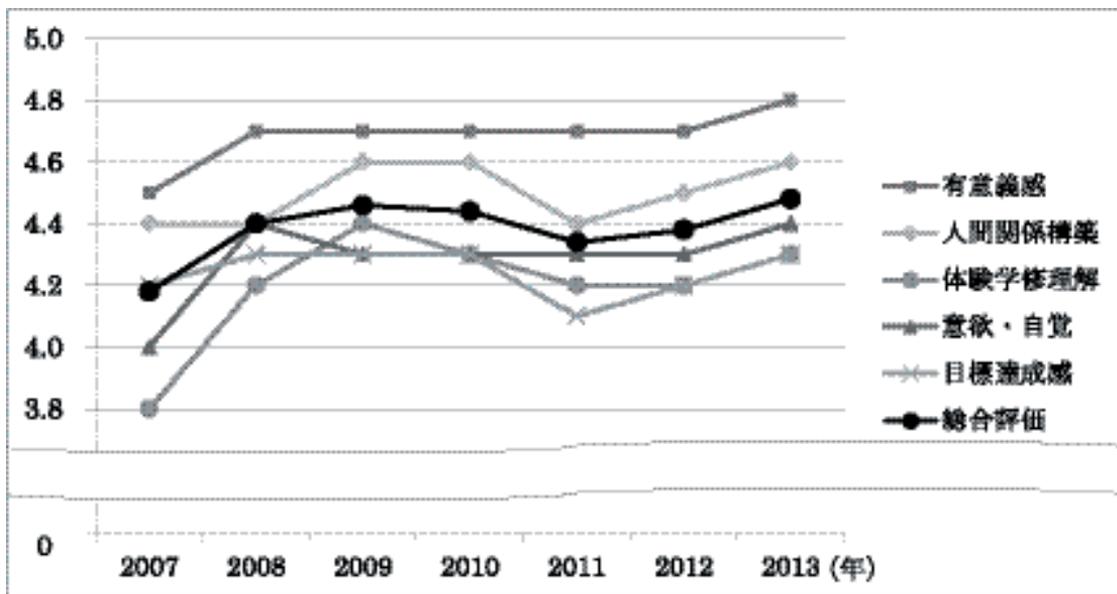


図10 新入生による入門期セミナーⅠの評価（参加新入生全員）

ピア・サポーターが増員されていった2007年から2009年にかけて新入生の評価は上昇傾向であり、特に2008年に大幅に改善がなされていることが分かる。これより、ピア・サポーターの人数がある程度必要であること、それによって新入生の意欲のみならず、1000時間体験学修についての理解についても伴って上昇していることが分かる。それ以降は2011年に一時的に下降しているが常に4.0以上の高水準を維持している。これより、2007年に学生企画会議による3つの提案がとても有効なものであったことが分かる。その提案を具現化することにより、本セミナーへの評価は高まり、教育学部の初年次教育の定番として必要不可欠なものに位置付けてきていると言えよう。

2013年度入学生による記述での評価について調査すると、これらの数値を裏付ける各観点における達成感のある回答のみであり、否定的な受け止めをしていると認められるものは皆無である。以下に一部であるが、紹介する。

2013年度入学生の記述による評価（一部抜粋）

- 1000時間体験学修のやり方だけではなく、意義も知ることができました。先輩の話聞くだけでも感動することもあり、自分も早くいろいろな体験がしてみたいと思いました。学生スタッフは年齢が1つか2つか変わらないのにともしっかりしておられ憧れました。自分も1年後には学生スタッフのような人になれるようがんばりたいです。たくさんの活動を通して人間として成長し、理想の教師像により近づいていきたいです。
- 教育体験活動に対する不安が少しありましたが、先輩の経験談や講義を通して、早く実習に出て積極的に子どもたちと関わりたいという思いがさらに強くなってきました。教師になるための道程を、実感を伴って確認することができたように思います。
- まだまだ友達も少ない中での泊まりがけの研修は不安もありましたが、積極的に話しかけ、より多くの友達を作ることができました。どれも充実した講義で、特にディスカッションでは気軽に質問できる雰囲気を作ってもらい、分からないことを聞け、共感できたことがよかったです。

記述による本セミナーの評価の論点を大きく整理すると、まずは現在の自分における課題を発見できることが挙げられている。大学での学びのあり方や求められる学生像を、ピア・サポーターの先輩の研修に臨む姿勢を通じて直接的に実感することができる。そして、今の自分に未熟な点、不十分な点を見出し、目指す学生像に向かって大学生生活に臨んでいこうとする積極的な姿勢をもつことができる。

次に、大学や教育学部についての理解ができることが挙げられる。1000時間体験学修を視点に当てた教師力の育成についての学びは、先述した積極的な姿勢が求められることは当然であるが、そのために必要なスキルについても具体的な例をもとに実践的に知ることができる。分からないことがあれば、容易に聞くことができる環境も用意されている。新しい仲間との協力によって実践される研修によって、その集団への帰属意識を感じ、自分の居場所を見出すことで、今後の授業において安心・安定した取組が保障される。

最後に、大学での学習や生活についての具体的なアドバイスを得られることである。生活の仕方は喫緊の課題であり、衣食住、アルバイトと学業、授業、部活動・同好会など、高等学校までの生活では経験していないあらゆる問題について直接かつ個人的にアドバイスを受けることで見通しをもつことができ、安心感をもって意欲的に生活を組み立てていくことができる。

いずれも、このような研修の機会をもつこと、そこに至る準備等にまで思いを至らせ、感謝の念をもっている。そして、「自分にさせていただいたように次の人に尽くしたい」という思いから、次年度には「学生スタッフになりたい」と希望をもつ学生も多い。

2 大学1年ギャップによる不安感・困り感の解消の度合い

本セミナーの意義は誰しもが認めるところとなっているが、当初各新入生が抱えていた大学1年ギャップにおける不安感・困り感について有効であるのかどうかについて分析する。

まず、アンケートを実施した2013年9月25日の段階で、不安感や困り感が解消されているのかどうかについて得た回答を図11に示す。

入学前後の不安感や困り感が後期の開始の段階で解消されている傾向の学生が67.6%、解消されていない傾向の学生が10.4%である。もともと困り感のない学生も含めると、約3/4の学生はこの時期において大学1年ギャップを乗り越えているもしくは乗り越えつつあると言ってよいが、約1割の学生は未だ不安感等を抱え、特に1.7%の学生については要配慮の状態である。

続いて、この不安感・困り感の解消に入門期セミナーIが役立ったと思われるのかどうかについて得た回答を図12に示す。

役立ったと捉える傾向の学生が68.7%で、これは不安感等が解消されている傾向の学生数とほぼ一致する。しかし、内訳はとても役立ったと実感する学生が全体の17.3%、肯定的傾向の中では25.2

%を占めている。役立たなかったと捉える傾向の学生が5.8%と少数ではあるが存在している。どちらとも言えないとしている学生が18.5%もあり、入門期セミナーIが直接的に有用かどうかは、様々な経験をしてきた9月の段階ではすでに判断がつかないのかもしれない。今後はアンケートを実施する時期について検討が必要に思われる。

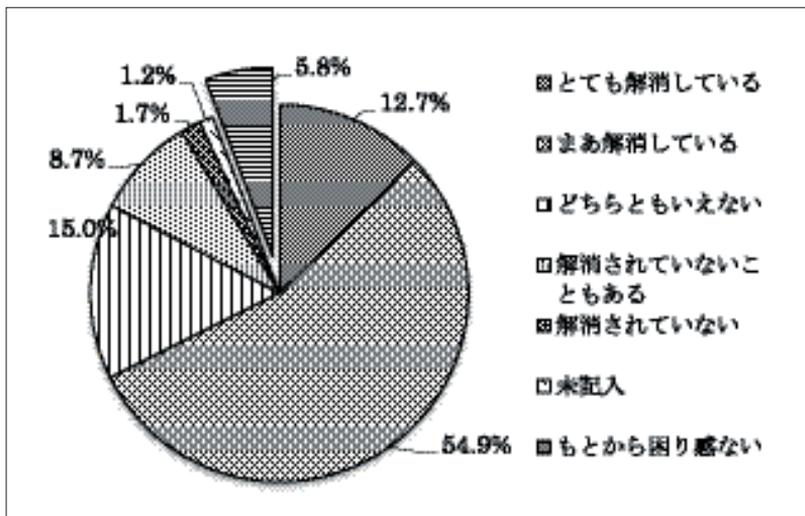


図11 2013年度入学生における入学前後の不安感・困り感の解消の度合い

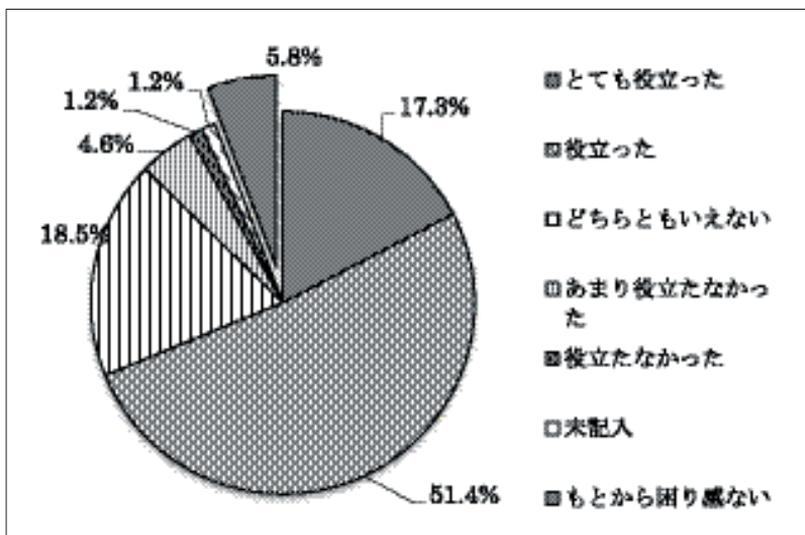


図12 2013年度入学生における入学前後の不安感・困り感の解消に係わる入門期セミナーIの効果の度合い

なお、本セミナーが入学前後の不安感・困り感の解消に役立ったと捉える傾向の学生（全体の68.7%）に、その理由を示してもらい集計したものを図13で示す。

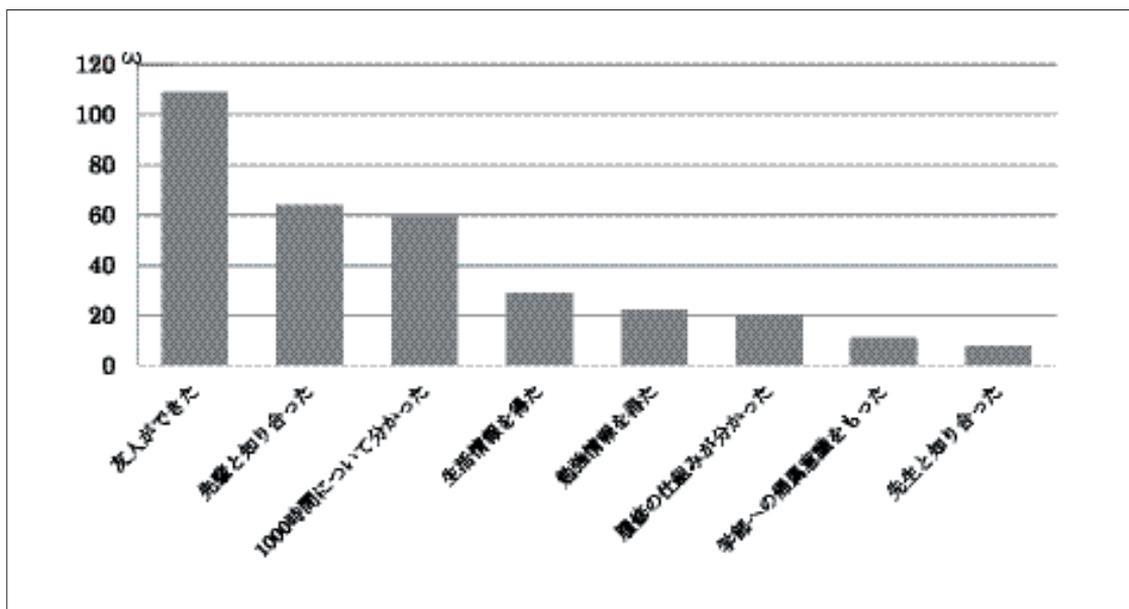


図13 2013年度入学生の入門期セミナー I における、不安感・困り感の解消となった理由 (対象学生119人、複数回答あり)

不安感・困り感の解消の理由として、ほとんどの学生が挙げたのが「友人ができた」ことである。このような機会を捉えて自分と同じ立場にある友人と人間関係をつくり、コミュニケーションを取ることで様々な不安感や困り感が解消できることは想像に難くない。各学生がお互いにつながり集団形成がなされていく。ピア・サポーターの存在も大きな理由になっている。そして、全新入生や大学の教員とともに宿泊活動を行うことで帰属意識をもつことで安心感を抱いた学生も見られる。友人ができる場として本セミナーが非常に効果的である理由を次のようにまとめることができるであろう。

- (1) 友人を作る意義を学ぶ (コミュニケーション能力など)
- (2) 友人を作るニーズと実践の場がある (グループワーク・レクリエーション、共同生活など)
- (3) 友人を作る実践の見本が間近にある (ピア・サポーター)

また、1000時間体験学修という新規プログラムについての理解やその他の未知である大学に関する学習や生活についての情報を得ることで、今後の見通しをもつことができることも重要な理由となっている。これらの解消理由は、単独で機能するものではなく相互に組み合わさって効果的に作用しているであろう。

これらの項目は、新入生の直面しているニーズと考えてもよい。ピア・サポーターが用意する工夫を凝らした研修は、新入生の立場を理解しそれらのニーズに対応したものとなることが、新入生の高評価を得続ける要因である。入門期初期に、時間を取って丁寧に工夫を凝らしたガイダンスを行うことは、準備は大変であるが、それによる成果を逆の立場で実感しているピア・サポーターだからこそ、新入生のために誠意を尽くして取り組んでくれる。

この二日間を過ごすことは、費用対効果で考えても非常に大きいものがあると考えられる。この研修で用意された6人ずつのグループは、本セミナー以後も学校教育実践研究Ⅰや学校教育実習Ⅰ、その他の授業や必修のセミナーにおいて活用され、定期的に顔を合わせることで、お互いを支える集団としての機能を維持させている。それ以降の4年間の大学生活に速やかに適応し、2年生以上で専攻別に分かれても専攻の枠を越えてコミュニケーションを取ることができ、充実した学びの環境を自ら整えることができていることは、本学部では、日々の様々な授業やセミナー、基礎体験活動などで随所に見ることができる。

3 入門期セミナーⅠに対するピア・サポーターの評価

ピア・サポーターは、本セミナーには基礎体験活動で募集された活動として登録し、事前指導ならびに事後指導を行っている。そこで記載している基礎体験活動記録票の該当事項である以下の8項目について数値での自己評価について記録の残っている過去3年間分（2011年33人分、2012年34人分、2013年36人分）において集計すると、平均値は図14の通りになる。

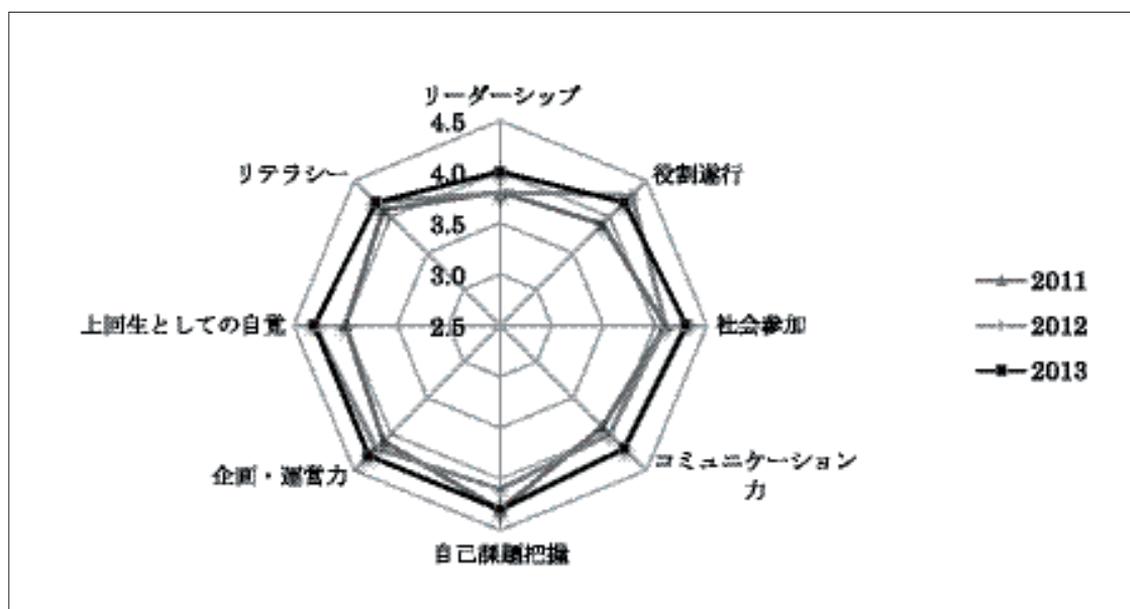


図14 ピア・サポーターの入門期セミナーⅠに対する自己評価

ピア・サポーターの自己評価は5段階評価において各年、各項目いずれも概ね4であり、高い数値を示していることより、多くの学びを総合的に得られたという実感を得ていることが分かる。記述による評価を調査しても、そのよさに関して記述しているものばかりである。大きく整理すると、リーダーシップのあり方や協調、企画力や運営力など自己能力の総合的な成長に関するものがまず挙げられている。そして、新年度当初に新入生に関わることにより、先輩としての自覚や基礎体験活動を始めとする今後の大学生活でのより質の高い活動の追求に意欲をもつことができることが言及されている。それらを通して、ピア・サポーターのメンバーとともに、同じ目標をもって活動できたことへの達成感や感謝の念をもつに至っている。

2013年度ピア・サポーターの記述による評価（一部抜粋）

- あこがれのジャケットを着て、あこがれのポジションに立てたことが幸せでした。実際には、たくさんの意見がぶつかり合い、辛いときもありましたが、その度に力を合わせ、結果的には成功に終わることができました。これまでの体験活動の中で一番時間をかけた活動になりました。
- 1年前の入門期セミナーⅠで「学生スタッフを務めてみたい」と思い、その一心で登録しました。1ヶ月間の準備期間において一生懸命な先輩や同級生とともに活動し、関わる中で多くのことを学びました。特に、企画の難しさ、スタッフとしての責任を改めて知ることができ、それらを背負って実際に活動を行ったことでやりがいを感じることができました。ともに頑張ったみんなに感謝しています。
- 1年生からも「楽しかった」という声が聞けてよかったです。リーダーシップの取り方やマナーについて自分自身振り返って改善できたところもあり、やってよかったと思いました。人間的にも成長でき、自信がつかえました。

Ⅵ おわりに

本セミナーの取組は、「1000時間体験学修」のガイダンス的位置づけからスタートしているが、その研修を通して得られる仲間や先輩、教員とのコミュニケーションにより、効果的に情報を得ることで、大学生活への不安感や困り感を効果的に解消し、それ以降の大学生活の適応・充実に大きな成果をもたらしている。また、ピア・サポーターを活用することで具体的なアドバイス等はもちろん、その活動自体に価値を見出して主体的に取り組む彼らの善意に基づく姿勢が新入生には新鮮に映り、双方にとって成長できるセミナーになっていることが分かる。そして、そのよさは代々に引き継がれ、専攻講座を越えた学部全体を挙げての活動を可能としている。学部全体で新入生理解を深め、入学当初に行うセミナーの重要性や価値を認め、ピア・サポーターが十分に活動できるように継続した支援を続けていきたい。

参考文献

- 1) 青山巧・長澤郁夫・池山圭吾・福間敏之・小川巖 2010. 新入生セミナーにおける学生の活用と成果-ピア・サポート活動と体験学修の高まり-. 島根大学教育臨床総合研究9:1-8.
- 2) 尾木直樹 2009. 「一人で食堂に入りにくい」6割. 朝日新聞. 2009年9月14日20面.
- 3) 浅尾健介・河原由依・田村俊貴・林大雅 2013. 「教師への扉は開かれた!!」. 島根大学教育学部オープンキャンパス学生フォーラム. 1000時間体験学修報告会資料.
- 4) 国立大学法人島根大学 教育開発センター HP:「初年次教育プログラムとは」
<http://cerd.shimane-u.ac.jp/fyep/index.html> .
- 5) 国立大学法人島根大学 教育開発センター HP:「初年次教育プログラム 教育学部」
<http://cerd.shimane-u.ac.jp/fyep/f02.html>.